

保育者効力感研究の現状と課題

岩 崎 桂 子

Present Circumstances and Problems on the Studies Preschool Teacher Efficacy

IWASAKI Keiko

キーワード：保育者効力感、保育内容「人間関係」、特性的自己効力感・一般的自己効力感

I. はじめに

近年、少子化が進み幼児教育の重要性が叫ばれていると同時に、幼児教育の質の向上についても問題視される機会が増えてきた。保育所などでも職員の研修に積極的に参加する園が増えてきたと同時に、保育者が学会などに入会し、研究を行い日々の保育に役立てている姿を多く見るようになった。その反面、保育の場面での問題も多くなり、保護者の対応の難しさや保育の困難な乳幼児も増加傾向にある。一人一人の子どもの成長に見通しを持ち、子どもの成長に合わせた園生活が送れるようにカリキュラムを作成するなど、臨機応変に、柔軟に物事に対応できる力を必要とされ、保育技術のみならず、人間性、保育に対する高い志が必要になってくる。そのため、幼児教育に携わる保育者（保育士・幼稚園教諭）の質の向上は避けては通れない問題である。このことから、保育士養成機関には保育能力の高い保育士の養成が期待されている。その中で、保育能力に関する要因の一つとして、「保育者効力感」という概念が注目されてきている。

保育者効力感とは、三木知子・桜井茂男（1998）^{注1)}によると、「保育場面において子どもの発達

に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」^{注1)}と定義され、従来より研究が進められている「教師効力感」の保育者版ともいえるものである。

教師効力感とは自己効力感の理論を応用したもので、教師効力感尺度を用いた、西松秀樹（2005）^{注2)}、松井仁・野口富美子（2006）^{注3)}、望木郁代（2008）^{注4)}、春原淑雄（2008）^{注5)}、などの多くの先行研究があり、広い範囲での研究がなされている。自己効力感とは、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信^{注6)}と呼んでいて、社会的学習理論の一つであり、人間の行動を決定する要因の一つである^{注7)}とされている。先行研究には、成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子（1995）^{注8)}、伊藤崇達・神藤貴昭（2003）^{注9)}、葛西真記子（2005）^{注10)}、佐藤祐基（2009）^{注11)}などがあげられる。これらの先行研究からも分かるように、自己の効力感の高さが、課題や場面の選択、努力量、困難に直面した際の耐性を通じて行動の遂行に影響するといえる。自己効力感の研究が多くなされている理由として、自己効力感と行動の動機づけとが深く関係していて、個人の行動の変容を予測し、不適切な情動反応や行動を変化させることができるという点があげられているからだろう。三宅幹子（2005）^{注12)}は、自己効力感以前のものでは、ある行動からおこる結果の認知に視点をあて、この視点が動機づ

けの主要因子であるとしていたものに対して、自己効力感では、「効力期待」ある結果を生むために適切な行動を自分がうまく出来るという確信と、「効果期待」ある行動がある結果を導くだろうという個人の予測^{注13)}、とを区別することにより、ある行動からくる結果は理解していても、行動をおこすかどうかの動機づけは高まらないという結果を説明可能にしている。すなわち、その行動が求める結果につながるとわかっている、(結果期待が高くても)、行動の遂行自体が無理であると認知していれば(効力期待が低ければ)、動機づけは高まらない^{注14)}ということになる(図1参照)。自己効力感とは行動と動機づけに深く関係しているという概念である。

上記のことから、行動と動機づけに深く関係する自己効力感を保育の分野に取り入れることは、保育の質を高めることや、保育者養成にも有効であると考えられる。本研究においては、保育者効力感に関する先行研究および、今後の保育者効力感の研究を考察することを目的とする。

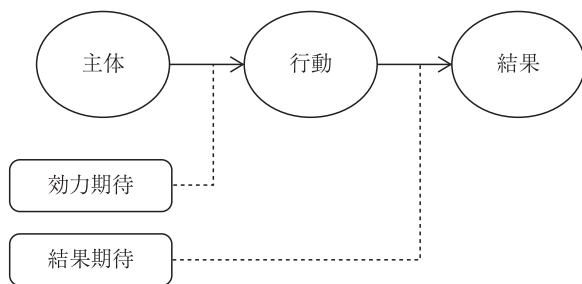


図1 結果期待と効力期待^{注15)}

II. 保育者効力感研究の歴史

保育者効力感は、保育者養成や保育者の意識の向上など様々な角度で重要となり、保育実践に大きく貢献できるものであると言える。しかしながら、保育者効力感という概念は保育の分野でもまだ浸透しておらず、先行研究の数も少ないように思われる。ここでは、保育者効力感の先行研究をまとめてみることにする。

保育の専門性を考慮して、教師効力感尺度を元

にはじめて保育者効力感尺度を開発したのは三木・桜井(1998)である。この尺度は保育専攻の学生を対象にし、幼稚園教育実習(保育実習)の有無が保育者効力感に与える影響を研究したものである。三木・桜井の先行研究(1998)では、幼稚園教育実習前より教育実習後のほうが保育者効力感が増すと報告されている。保育者効力感が高まる要因として「実習園への合致感」、幼稚園実習自己評価の「保育職への意欲・自信」が挙げられている。しかし、この結果は実習で配属された幼稚園が自分の期待に添えないと思えたり、楽しく実習を行えなかったという学生に比べて保育者効力感が高まったといえ、一般的な保育者効力感の研究と考えるには調査対象に若干の問題があるように思える。その理由として教育実習前の学生を対象にするということは、現場をまだ経験していない学生ということで、現実の現場に即したものでなかった可能性が考えられる。

次に、西坂小百合(2002)^{注16)}による、幼稚園教諭のストレスと保育者効力感の関連性についての研究がある。この先行研究では、ストレス因子として「園内の人間関係」、「仕事の多さと時間の欠如」、「子どもの理解・対応の難しさ」、「学級経営の難しさ」の4因子が挙げられている。そのなかで、「子どもの理解・対応の難しさ」、「学級経営の難しさ」の2因子はストレスの低さとの関連を示している。しかし、この2因子に関しては、精神的健康への直接的・間接的な影響は示されていない。このことから、保育者効力感とストレスは影響がないことが示されている。なお、西坂(2002)はその後、幼稚園教諭のストレス内容を踏まえ、ストレス評定尺度を作成している。

次に、中村多見(2006)^{注17)}の保育学生の保育者効力感の発達に関する先行研究があげられる。この先行研究では、保育学生を対象に「保育者効力感尺度」の精度を検証するとともに、1年次と2年次での保育者効力感の変化を検証している。その結果、4月では $\alpha = .82$ と10月では $\alpha = .83$ と時期を分けて検証して、どちらも高い数値から、信頼度は得られている。1年次と2年次との

関連では、1年次の方が保育者効力感が高いという結果が出ている。これは、三木・桜井（1998）の研究で得られた結果とは反対のものとなった。その理由として、入学直後の学生に調査を行ったため、「入学直後の保育者になる強い期待感」が影響したためではないかと考察している。このことから、実際に保育の現場に身を置くことで保育者効力感尺度の効果を発揮するのではないかと考えられる。

次に、西山修（2006）^{註18）}の多次元保育者効力感尺度の作成を行った研究がある。この研究以前までは、保育者効力感という三木・桜井（1998）の先行研究で開発された尺度を使用する研究がほとんどであったが、この研究では従来の保育者効力感に保育内容「人間関係」の領域を加えて、子どもの人と関わる力を育むことに着目して新しい尺度の開発に取り組んでいる。以前までの保育全般を問う保育者効力感尺度ではなく、多次元から保育を検証することを目的として開発された尺度である。従来の保育者効力感尺度に12項目の「人間関係」に特化した項目を加えて、 α 係数を算出したところ、5因子の総合得点で $\alpha = .921$ という高い得点が得られている。これにより、多次元保育者効力感尺度の内的整合性・安定性の観点からも非常に高い信頼性を確認している。

上記の尺度の開発により、その後の保育者効力感に変化が見られるようになった。

朝木・鈴木の研究（2009）では、西山（2006）の尺度を用いて、保育者効力感と子ども観の関連について研究をおこなっている。この研究では保育者効力感を「子どもの人とかかわる力の育ちに変化を与えることができるという保育者の信念や実現可能性の認知」と定義し直し、新たに「人間関係」領域に特化した尺度を用いている。保育者効力感を「人とかかわる基盤をつくる」、「発達の視点で子どもを捉えること」、「子ども同士の関係を捉えること」、「基本的な生活習慣・態度を育てる」、「関係性の広がりを支える」の5因子に因子分析し、子ども観との関係を検証している。「人と関わる基盤をつくる」因子と子ども観との分散

分析では、子ども達から関わりを求められることで、保育者自身も子どもから信頼されているという気持ちを強く持ち、子どもの気持ちに寄り添う保育ができるとされている。このことから、保育者と幼児が互いに大きく成長しあうという相互的な営みであるとしている。「関係性の広がりを支える」因子と子ども観の分散分析では、保育者効力感の高い保育者は、子ども達の関わりを広げ、日常の自然な姿から子どもたちの能力を認め、可能性を伸ばす保育を実践している、という報告がされている。また、この研究では、保育者効力感と勤務役職の関連についても検証を行っている。クラス担任と主任保育者・フリー保育者との「発達の視点で子どもを捉える」因子に違いがあると指摘している。主任保育者やフリー保育者のように日や時間により、さまざまなクラスに入るということは、各年齢における発達段階を頭に入れて保育を行う必要があるとしている。しかし、5歳児担任の保育者と主任保育者・フリー保育者の間に大きな差が見られないのは、就学を意識してこれまでの継続的な発達を振り返りながら保育を行っているからではないかと指摘している。

上記の朝木・鈴木の先行研究（2009）は、従来の保育者効力感の研究を行う際、調査対象が保育専攻の学生であったり、実習との関連から検証するケースがほとんどであったのに対し、現役の保育者を対象にしている点は今後の保育者効力感研究に大きく影響すると思われる。また、「人間関係」という点に着目し、保育実践に直結した保育者を対象にすることで、保育職の理解、保育者の保育に対する姿勢等を知るうえで重要であると感じた。

保育者を目指す学生の意識改革を行うことは、未来の保育の質の向上に大きな影響を与えるが、現在、保育を行っている保育者の理解に努めることで、保育者養成校での指導に変化をもたらすきっかけになるのではないかと考えられる。保育ニーズの多様化が進み、保育者を取り巻く環境も日々変化している中で、今何が求められているのか、保育者の意識を知ることが保育の質の向上に

つながるのではないかと思われる。

このように、保育者効力感の先行研究はまだまだ数は少なく、研究は始まったばかりだと言える。しかし、保育者効力感も時代に合わせ少しずつ変化し保育者の行動の動機づけを解明し、さらには、また違った形の尺度へと変化を続けている。

Ⅲ. 保育者効力感尺度について

ここでは、三木・桜井（1998）の開発した保育者効力感尺度と西山（2006）の多次元保育者効力感尺度について、検討をしていく。

（1）三木・桜井（1998）の開発した保育者効力感尺度について

まず、三木・桜井（1998）の保育者効力感尺度の妥当性に関しては、検討のため、2つの尺度を用いている。一つは、坂野（1989）の一般性セルフ・エフェカシー尺度と鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治（1982）^{注19}によるLocus of Control尺度（内的統制感）との関連を求めている。坂野（1989）の一般性セルフ・エフェカシーとは、人格特性としての「一般的な自己効力感」を測定するもので、16項目から構成されている尺度である。セルフ・エフェカシーとは、ある結果を生み

出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信である。そして、セルフ・エフェカシーを個人がどの程度、身につけているかを認知することが、その個人の行動の変容を予測し、情動反応を抑制する要因となっているとされている。Locus of Control尺度とは、人間が一般的に自分自身の行動と強化の生起が随伴しており、強化の統制が可能であるという信念を持っているかどうか、行動を予測する上で重要な変数であると考えられている。

坂野（1989）は人格特性としての一般的な自己効力感を「特性的自己効力感」としている。保育者効力感とは保育という限られた場面における自己効力感ということになる。そのため、一般的自己効力感と保育者効力感とは自己効力感の2つの水準と位置付けられ、一般的自己効力感と保育者効力感の間には、正の相関があると予測される。また、三木・桜井の先行研究（1998）で、一般的自己効力感が高い者は、内的統制傾向も高いと示されている。そのことから、内的統制感と保育者効力感の間に正の相関があると考えられる。特性自己効力感・内的統制感と保育者効力感の尺度得点との間には、特性自己効力感と保育者効力感とは $\gamma = .40$ 、内的統制感と保育者効力感とは $\gamma = .23$ （いずれも $p < .01$ ）の相関係数が得られており、

表1 保育者効力感尺度（三木・桜井 1998）^{注20}

項目番号	尺度項目
1	私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う
2	私は、子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う
3	保育プログラムが急に変更された場合でも、私はそれにうまく対処できると思う
4	私は、どの年齢の担任になっても、うまくやっていけると思う
5	私のクラスにいじめがあったとしても、うまく対処できると思う
6	私は、保護者に信頼を得ることができると思う
7	私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う
8	私はクラス全体に目をむけ、集団への配慮も十分できると思う
9	私は、1人1人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う
10	私は、子どもの活動を考慮し、適切な保育環境（人的、物的）に整えることに十分努力できると思う
R	私が一生懸命努力しても、登園をいやがる子どもをなくすことはできないと思う
R	私は保育者として、クラスのほとんどの子どもが理解できるように働きかけることは無理であると思う
R	私は、クラスの子どもの1人1人の性格を理解できると思う
R	私が、やる気のない子どもにやる気を起こさせることは難しいと思う
R	私は、園で子どもに基本的な生活習慣を身につけさせることはなかなか難しいと思う

三木・桜井の研究（1998）で作成された改訂版保育者効力感尺度は信頼性も妥当性も認められるものとなっている。

また、保育者効力感と幼稚園実習自己評価、幼稚園実習成績との相関も調べており、実習終了後の保育者効力感と幼稚園実習自己評価との間に中程度の正の相関を（幼稚園実習自己評価は3つの下位尺度に分けられ、それぞれの相関係数が $\gamma = .33 \sim \gamma = .54$ 、いずれも $p < .01$ ）、幼稚園実習成績との間には低めではあるが有意な正の相関（ $\gamma = .18$ 、 $p < .05$ ）を得ている^{註21}）。

このように、三木・桜井（1998）の尺度は、丁寧に妥当性の検証がなされていると言える。しかし、実習前後に保育所実習と幼稚園実習の両者が実施されていた。ゆえに、幼稚園実習の前後において幼稚園教諭設定、保育所実習前後において保育所保育士設定で保育者効力感を測定し比較する必要があると指摘している。また、項目数の少なさから、保育者効力感すべてをカバーしているとは考えづらい。おそらく、保育職に就く者すべてに対応できるよう広範囲な尺度開発を行ったからではないだろうか。よって、保育者の中でも、特定の職務内容に就いている者に対応するのは難しいのではないかと考えられる。

この尺度は、10項目からなり、1因子構造である。Rは反転項目であることを示す。評定は「非常にそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそうは思わない」、「ほとんどそうは思わない」の5段階で求める。

（2）西野（2006）の保育者効力感尺度について

この尺度は、三木・桜井（1998）の保育者効力感尺度に人間関係の領域を盛り込み、多次元的な尺度の開発を行ったものである。以前の保育者効力感尺度は単因子構造を仮定して作成されており、保育者の職務内容のすべてを網羅するものとしては不十分と言わざるを得ない。なぜなら、多次元から効力感を捉えることによって、保育者は詳細な個人の情報を得ることができ、自らの具体的な課題を見出すことができるのである。とりわ

け、広範囲な内容を含む保育内容「人間関係」では、多次元的に捉え課題を整理することが、保育者の資質向上には有効であるという点から改良を加えたものである。

まず、保育実践での有効性を確保するため、現役保育者に保育内容「人間関係」に関して、「今、保育者に求められている力量とはどのようなものだと思いますか」など4項目で、自由記述で回答を求めている。記述の意味内容やニュアンス等を詳細にわたり聞き取りを行い、子どもの人とかかわる力の育成に関する表現を抽出し整理を行っている。さらに、調査の段階で養成期から利用可能な尺度を作成するという意図から養成校3校での調査を行っている。

これらを元に、「人間関係」保育者効力感の5因子と、三木・桜井（1998）の保育者効力感尺度と、「困難性の認知」、「関心の強さ」、「現在の保育実践」という項目の相関を取り、この段階で5因子を最適解とした。第1因子は「人と関わる基盤をつくる」、第2因子は「発達の視点で子どもを捉える」、第3因子は「子ども同士の関係を捉える」、第4因子は「基本的な生活習慣を捉える」、第5因子は「関係性の広がりを支える」としている。因子名については、因子の特徴を表現する単語や専門用語を当てるのが慣例であるが、ここでは現職保育者や学生にも理解されやすい、ねらいや内容を示すような表現を当てている。この因子間相関では、いずれも高い値を示している（ $r = .67 \sim .73$ ）。また累積寄与率は59.18%と比較的高い数値が出ていることから、「人間関係」保育者効力感を5因子構造で捉えることの有用性が確認できていると言える。

信頼性の検討では、各下位尺度について α 係数を算出したところ、第1因子で $\alpha = .852$ 、第2因子で $\alpha = .871$ 、第3因子で $\alpha = .871$ 、第4因子で $\alpha = .877$ 、第5因子で $\alpha = .852$ であり、すべての因子で高い数値を示している。また、尺度全体の α 係数は $\alpha = .959$ であり、尺度全体としての「人間関係」保育者効力感という一貫した概念を測定していることを示している。さらに1ヶ月

後の検査でも $a = .921$ という十分な値を示している。

妥当性の検討では、各尺度との相関形成数で全体で .81 と高い正の相関がみられている。このことから、子どもの人とかかわる力を育てるために、何らかの行動を意識的に行っていることになる。効力感と保育実践は強い関係があることになる。西野（2006）の多次元保育者効力感尺度は、保育内容「人間関係」の内容を含み、保育者の成長や質の向上・維持を知るのに有効で、今後の保育に役立つものであると考えられる。

また、以前の保育者効力感尺度との違いは、質問項目の表現のちがいである。このことで、学生や保育者への調査が行いやすくなった点は今後の研究に大きく貢献していると言える。

IV. 保育者養成校の視点から

本章では以上の視点を踏まえ、保育者効力感が養成校に与える影響について考察を行いたいと思う。

保育者効力感とは、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」^{注22)}と定義され、保育者効力感の研究では、学生を対象にするケースがほとんどである。

近年、保育所・幼稚園などの現場では多様化した保育・保護者のニーズと様々な課題を抱えている。そのため、こうした問題に取り組む現場の保育者の資質が大きな影響を持つことは明確である。このような状況を受け、保育者養成校では柔

表2 「人間関係」保育者効力感尺度^{注23)}

項目設定	尺 度 項 目
第1因子	人とかかわる基盤をつくる $a = .835$
	1 信頼される存在として子どものそばに居ること
	6 子どもにとって心のより所になること
	11 子どもとの安定した関係を築くこと
	16 子ども一人一人をありのままに受容すること
	21 子どもの自我（思い、言い分）を大切にすること
第2因子	発達の視点で子どもを捉えること $a = .887$
	2 子どもの人間関係の発達に応じてかかわること
	7 子どもの人間関係の育ちに即して、環境を構成すること
	12 子どもの人間関係の発達について、見通しをもって援助すること
	17 保育の展開と人間関係の育ちを結び付けて捉えること
	22 子どもの人間関係の育ちについて専門的な知識を生かすこと
第3因子	子ども同士の関係を育てる $a = .872$
	3 けんかや葛藤を経ながらも、子ども同士で解決できるように援助すること
	8 自己主張や反抗も自我の育ちと捉えて適切に対応すること
	13 子どもが他の子どもの発言や気持ちを受け入れられるよう援助すること
	18 園生活の中で、必要な道徳性を身につけるように保育すること
	23 子どもが友達とかかわることで充実感や満足感を味わえるような保育をすること
第4因子	基本的な生活習慣・態度を育てる $a = .865$
	4 子どもが生活上のルールを知ることができるように保育すること
	9 社会生活上の習慣や態度を子どもが身につけていけるよう援助すること
	14 きまりや約束の大切さに気付き、守ろうとする態度が育つ保育をすること
	19 子どもがよいことや悪いことがあることに気付き、行動できるよう実践すること
	24 園生活の中で子どもの自立心を育むこと
第5因子	関係性の広がりを支える $a = .839$
	5 地域のお年寄りなど身近な人に感謝の気持ちをもてるよう実践すること
	10 子どもが地域の人々など自分の生活に関係のある人に親しみをもてるよう援助すること
	15 特別な支援を要する子どもも含めたクラスの豊かな関係をつくること
	20 外国の人などの文化の違いに気付き、尊重する心が育つよう保育すること
	25 子どもが様々な人と触れ合いながら人間関係を広げていけるよう援助すること

軟な感性を持ち、豊かな資質を持ち合わせた学生を現場に送ることが大切である。

豊かな資質を持つ学生とは、適切な保育を実践できる資質と保育技術の両方を兼ね備えている学生と言える。この両方を兼ね備えている学生は、現場において円滑な保育業務を行えるとともに、子どもの育成にも不可欠な存在となるのである。したがって、将来保育に携わる学生を対象とした研究は意義深く、養成校における今後の教育、指導にも有意義な意味を持つと言える。

石川の先行研究(2003)^{注24)}では、学生が養成校に入学してから、徐々に保育者効力感が減少する傾向にあると報告している。この背景には保育に対する夢や希望をもって入学するが、実習や授業などを通して現実に直面し、不安や疑問が出てくることで保育者効力感が減少するのではないかと考えられる。その時期に実習の事前事後指導をしっかりと行うことで、その後の保育指導で学生自身が実習に対する具体的な知識・実習で学んだ経験を様々な角度から考察を加え、保育者になる目的意識が薄れずにいるように、フォローしていくことが重要になるだろう。保育者効力感を高めることは、学習意欲を高め、目的意識をはっきり自覚することにつながっているのではないだろうか。それは、保育者効力感という概念は自己効力感からきているからである。また、2年次になると、就職活動というストレスが保育者効力感に与える影響についても考慮しなければならないだろう。保育現場という限られた就職先での就職活動で生じる問題について、自分自身や保育職について考える余裕を持つことは難しいのではないだろうか。

さらに、学生の就職後の離職率と保育者効力感との関係を調べることで、養成校として学生時代にどのようなアプローチができるのかを考えるきっかけになるのではないだろうか。保育者1年目の保育者効力感とは学生の入学1年目と同じように減少するのではないかと予想される。やはり、そこには実習とは違う立場で子どもや保護者に向き合うこと、環境への適応力などが関係している

と考えられる。

保育者養成校の視点では、このように学生の保育者効力感の変動を理解し、その時期に適切な教育を行うとともに、就職してからのサポートや、保育経験を積むなかで、新人を教育する立場になった際の対応を考察するのに重要な研究であると思われる。

V. 今後の研究の展望

上記のことを踏まえ、今後の研究の方向性について考察を行う。保育者効力感についての研究はまだ歴史も浅く、「人間関係」保育者効力感尺度を用いての研究は少ない。保育の広い範囲に含まれる「人間関係」保育者効力感尺度を使用することで、保育者の理解に努める必要がある。研究の方向性として、長期にわたり研究を行うことで、保育者としての成長が保育者効力感にどのような影響を与えているのかを知ることは、保育者効力感の変容という側面を明らかにすることになるのだろう。

そして、保育者としての成長を解明することは、養成校にとっても大きな意味をなす。有能な保育者養成という観点からいうと、具体的な技術の習得と経験、精神面での発達が発達が保育者効力感に与える影響を解明することで、さらに効果的な教育を提供できるだろう。

また、保育者を対象とした研究を行うことで、変わりゆく保育現場の理解につながると考えられる。しかし、保育者を対象とした学術論文は極めて少なく、保育実践に直結した保育者の保育者効力感を研究することは意義深いものとなる。子どもの生活の大半をともに過ごす保育者が子どもの発達に影響をあたえていることは明らかである。だからこそ、保育者効力感を知り、日常の保育で保育者自身が抱いている保育職に対する意識や援助の関わり方を見直すことができ、一層の幼児理解と保育実践のきっかけになるだろう。

最後に現在の保育者効力感研究の印象として、時代の流れに合わせ、保育現場で求められる保育

内容や質の変化などに敏感に対応できる尺度の開発が必要になるだろう。また、幼稚園や学童のように、保育所とは違った場での保育者効力感とはどういう状態なのかを理解し、保育のどのような場面に重点を置いているのかという点を反映した尺度の必要性は高まるのではないだろうか。

注

- 1) 三木知子・桜井茂男「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」『教育心理学研究』第46巻 第2号、1998年、P83
- 2) 西松秀樹「教師効力感と不安に関する研究」『滋賀大学教育学部紀要』第55巻、2005年
- 3) 松井仁・野口富美子「教師のバーンアウトと諸因子—ストレス、効力感、対処行動をめぐって—」『京都教育大学紀要』第108巻、2006年
- 4) 望木郁代「教育実習の教育力向上に関する研究」『高田短期大学紀要』第26号、2008年
- 5) 春原淑雄「教育学部生の教師効力感とその関連要因」『教育心理学研究』日本教育心理学会第50回総会発表論文集、2008年
- 6) 坂野雄二「一般性セルフ・エフェカシー尺度の妥当性の検討」『早稲田大学人間科学研究』第2巻 第1号、1989年、P91
- 7) 朝木徹・鈴木由美「子どもの人間関係を育む保育実践の要因—保育者効力感と子ども感の関連について—」『聖徳大学児童学研究紀要』第11号、2009年、P109
- 8) 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子「特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—」『教育心理学研究』第43巻 第3号、1995年
- 9) 伊藤崇達・神藤貴昭「自己効力感、不安、自己調整学習方略、学習の持続性に関する因果モデルの検証—認知的側面と動機づけの側面の自己調節学習方略に着目して—」『日本教育工学会論文誌』第27巻 4号、2003年
- 10) 葛西真記子「カウンセリング自己効力感尺度 (Counselor Activity Self-Efficacy Scales) 日本語版作成の試み」『鳴門教育大学研究紀要』第20巻、2005年
- 11) 佐藤裕基「自己効力感と性格特性との関連」『人間福祉研究』第12巻、2009年
- 12) 三宅幹子「保育者効力感研究の概観」『福山大学人間文化学部紀要』第5巻、2005年、P31
- 13) 同上、P32
- 14) 同上、P32
- 15) 前掲、「保育者効力感研究の概観」P32
- 16) 西坂小百合「幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響」『教育心理学研究』第50巻、2002年
- 17) 中村多見「保育学生の保育感 (1) —保育者効力感の発達—」『高松大学紀要』第45巻、2006年、PP197～206
- 18) 西山修「幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成」『保育学研究』第44巻 第2号、2006年、PP150～159
- 19) 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治「Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討」『教育心理学研究』第30巻 第4号、1982年
- 20) 前掲、「保育者効力感研究の概観」P32
- 21) 同上、P35
- 22) 前掲、「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」
- 23) 前掲、「子どもの人間関係を育む保育実践の要因—保育者効力感と子ども観の関連について—」
- 24) 石川隆行「保育者を目指す短大生の保育者効力感について」『一宮女子短期大学研究報告』第42号、2003年

参考文献

- 1) 岩立志津夫・諏訪きぬ・土方弘子・金田利子・木下孝司・斎藤政子「保育者の評価に基づく保育の尺度」『保育学研究』第35巻 第2号、1997年
- 2) 嘉数朝子・渡嘉敷あゆみ「保育者効力感と幼児のコミュニケーション・スキル—保育職志望度との関連で—」『日本保育学会大会研究論文』第53号、2000年
- 3) 高濱裕子「保育者の熟成プロセス：経験年数と事例に対する対応」『発達心理学研究』第11巻 第3号、2000年
- 4) 原田博子「幼児教育科短大生の子ども観—母親との比較—」『筑紫女学園短期大学紀要』第38号、2003年
- 5) 森知子「保育者を志す学生の自己効力感と実習評価の関連」『臨床教育心理学研究』第29号、2003年
- 6) 諏訪きぬ「人的環境としての保育者（総説）」『保育学研究』第42巻、2004年
- 7) 渡部努・嶋崎博嗣「保育者の保育者効力感と心理社会的要因に対する過去の遊び経験の影響」『日本保育学会大会研究論文集』第57巻、2004年
- 8) 小原敏郎・武藤安子「保育の質とレジリエンス概念との関連」『日本家政学会誌』第56巻 第9号、2005年
- 9) 西山修「幼児の人とかかわる力を育むための保育者効力感尺度の開発」『乳幼児教育研究』第14号、2005年
- 10) 丹藤進「教師効力感の研究—循環モデルに向けて—」『青森中央学院大学研究紀要』第7号、2005年
- 11) 石川隆行「保育者を目指す短大生の保育者効力感について—2月の追跡調査より—」『聖母女学院短期大学研究紀要』第34集、2005年
- 12) 大城りえ・上地亜矢子・津多久美子「保育科学生の保育者効力感に関する研究」『沖縄キリスト教短期大学紀要』第35号、2006年
- 13) 玄永牧子「保育者養成コースの学生における保育者効力感に関わる要因」『福島学院大学研究紀要』第40集、2008年
- 14) 春原淑雄「教育実習体験が教育学部生の教師効力感に及ぼす影響」『学校教育学研究論集』第17号、2008年
- 15) 西松秀樹「教師効力感、教育実習、教師志望度に及ぼす教育実習の効果」『キャリア教育研究』第25号、2008年
- 16) 塚本美知子・森川文子・藪中征代・徳永静江・大熊光穂「保育者養成における実習経験が社会スキルおよび保育者効力感に及ぼす影響」『聖徳大学児童学研究所紀要』第10号、2008年
- 17) 今野亮「保育者効力感に影響を及ぼす要因の検討」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』第30巻、2009年

(東萌保育専門学校専任教員 岩崎桂子)